

設立 平成24年 5月 15日
開塾 平成24年 9月 8日
発行 令和 6年11月 9日
(138号)

[事務局] 〒567-0861
茨木市東奈良2-7-10
人間学塾・中之島
事務局 古田修平
編集長 西村俊幸

中之島ニユース

またこの先の八百年を脳科学の観点で見る
と、女性性とは右脳優位で直感的・情緒的・
包容力・協調性など横のつながり、一方男性
性は論理的・理性的・直線的・独自性など、
ピラミッドのような縦のつながりとかかわり
が深い。優劣をつけようとする戦いは左脳的
社会の形がこれまで男性的であつたことに氣
づきます。その時代にももう限界が来ていま
す。日本国家を一言で表すと「和」、これか
らの時代は横の繋がり、「和」のあり方へと
移行するでしょう。

文明は八百年ごとに入れ替わるという説があります。つまりこれまでの西洋文明（陽）主体から東洋文明（陰）となる。過去八百年前を見ると、インド、中国というアジア圏の国が世界を牽引していました。再びその時代が来ようとしています。日本においては、八百年前のその頃源頼朝が日本初の武家政権を樹立し、武士の文化は熟成、発展する時代でした。いま、禅や茶の湯など海外の日本文化への関心は高く、今後武士道は日の目を見るに至るでしょう。

北条泰時
道に慈悲を説いた人
真理子先生
(十月度特別講義より)

明惠上人は武家の家に生まれ八歳で出家して以降、華厳、密教、真言密教などあらゆる仏教を学ばれ、一二〇六年後鳥羽上皇より母尾の地を賜り高山寺を開きます。北条泰時は鎌倉幕府樹立の二年前に二代執権北条義時の子に生まれました。泰時は承久の乱において幕府の総大将として上洛しています。父の死後、政子の任命により、三代執権に就任、いかに当時女性が力を持っていたかが分かります。男女が対等であつた時代なのです。

ことを意味します。それはまさかの承久の乱により泰時は明惠と出会い、御成敗式目の内容は慈悲あるものに決まっていった。泰時にせよ明惠にせよ、何百年もの先の日本人の末代にまでこの出会いが影響を及ぼすとは思つてもみなかつたでしよう。鎌倉時代の武家政権の樹立から、武士としての意識の立ち上がりが一つの結実した形となつた。それが何百年も引き継がれていたということは、私たちの中も入つてゐるということです。

泰時は政治体制の立て直しとして、合議政を導入したり、独裁にはならないよう執権を共有了したほか、一二三二年に御成敗式目を制定しました。今に近い政治体制が、このときすでに用いられていたのです。体制を整えるきっかけとなつたのは承久の乱です。後鳥羽上皇と鎌倉幕府の関係が悪化、誰もが上皇側に就くと思われた中で、武士の心を一つにした北条政子の大演説は有名です。

「敗軍の兵を匿つていた」として捕らえられたのが明惠上人、それが泰時との出会いになります。泰時は明惠に仏法を学びました。明恵は「道理は救いにならない、罪を背負つて生き、仏法を信じて政治を行うこと」と慈悲心

泰時が明恵の教えを落とし込んでいったものが御成敗式目です。これは一言で言えば、弱いものを慮る法と言えます。例えばその当時女性が土地財産を有することができたり、立場の弱い領民も守られていた。そしてこの御成敗式目は鎌倉時代だけのものではなく、江戸時代になつてから、寺子屋での手習いにされていました。つまり江戸時代二八〇年に亘り、小さな子供たちが御成敗式目を読んでいたのです。これは鎌倉時代にできた武士の心得が、江戸時代には庶民にもいきわたつた

一人は阿留辺幾夜宇和（あるべきやうわ）の七文字を持（たも）つべきなり。僧は僧のあるべき様、俗は俗のあるべき様、臣下は臣下のあるべき様なり。此あるべき様を背く故に、一切悪しきなり。」（『遺訓』明惠上人）

こうあるべき、というのは自分を型に入れようで苦しくなるあり方かもしません。しかし、筋の通つた人間を目指すとき、一度は通らねばならない道です。そうして身を律してゆく。日本は型の文化です。鋳型に嵌るよう自ら努力する、そしてそれをやり続けた結果、鋳型に嵌らないのが人間だとやがて分かる。茶道や武道でもその型が身についたときには、立ち上つてくるのが個性です。自分はこういう存在であったと気づける。それに気づくためにも「あるべきやうわ」は大切であり、型を持たずに個性、自由、自分らしさを求めて、それは型無しでしかない。自分しさを求める前に、自分の宿命（国、時代、親等々）を思い知らないうちは、「私らしさ」は立ち上がってはこない。その意味でこの「あるべきやうわ」の教えは大事であり、また、明惠上人も仰るように、これがないから世の中が乱れるのだと思います。

《グループ討議》 石川 真理子 先生

- ◆ A グループ
 - ・ 北条政子の演説
 - ・ 御成敗式目の背景
 - ・ あるべきやうわ 型を身に付ける
- ◆ B グループ
 - ・ 御成敗式目が生きている
 - ・ 罪を背負う
 - ・ あるべきやうわ 型を身に付ける
- ◆ C グループ
 - ・ あるべきやうわ 型を身に付ける
 - ・ 罪を背負う
 - ・ 御成敗式目への思い
- ◆ D グループ
 - ・ あるべきやうわ
- ◆ E グループ
 - ・ 女性性の時代
 - ・ 上に立つ人ほど下座の心が必要
 - ・ 忠義の双方向
- ◆ F グループ
 - ・ 罪を背負う
 - ・ 上に立つ人ほど自分を律する
 - ・ 型を身に付けてこそ自分の自分らしさ



司会進行 石黒 尚塾生



講師紹介 岡本ユウコ塾生



講義風景



グループ討議風景



藤田 耀平塾生



笠原 勝 塾生



河崎 利香 塾生



濱田 久美 塾生



池永 辰朗 塾生

塾生からも学ぼう！塾生講話！



井上 貴子 塾生 「日本人としての目覚め」



私は和歌山の田舎で生まれ育ちました。自分の子どもが知的障がいを持って生まれてきたことをきっかけに、なぜ人は生きていくのかと考えるようになります。目に見えない力や神様のような存在のことも思うようになりました。また、心の世界も知りたいとカウンセリングを学び、カウンセラーになりました。

ある日、当時の石原都知事がテレビで記者に言い放った「君たちは先の大戦がどういう意味を持っていたか知らないだろう？一度調べてみるといい」の言葉が自分に問われているように感じました。戦後生まれの記者が何ら教育を受けてこなかったことを石原都知事は憂いていたのだと思います。8月6日の原爆の日を誕生日とする私には、その言葉に強く感じるものがありました。学校では「日本が悪い」という歴史教育を受け続け、日本という国には誇りは持てずにいました。私は日本を「国民を戦争に引き摺り込んだ」と本気で思っていました。それまで学ぶ機会がなかったのです。

中川さんとのご縁で人間学塾・中之島を知り、日本の素晴らしいを知る機会を得ることができました。しかし、いまだ多くの人が何も知らないどころか疑問さえ抱かないままだと思います。今では日本人の御靈、魂という思い、そして自分を律し、行いや徳を積んでゆく大切さを実感しています。今後も学び続けてゆくこと、そして一人でも多くの人が日本人として目覚めて欲しいと願っています。

林 秀宣 塾生 「縁の下の力持ちとして生きる」



「宿命」とは生まれもって決まっているもので変えられない。一方「運命」はさまざまな選択肢があり、変えられる。自分の在り方・生き方で人の出逢いも変わり、人との出逢いで自分の人生も変わると実感しています。

昭和36年末熟児で生まれた私は病弱でした。少年期の思い出は1970年の大阪万博で、松下館のタイムカプセルには壮大なロマンを感じ何度も通ったこと。青年期に松下幸之助翁の「無税国家論」に出会い、税理士を目指すきっかけとなります。ところが税理士試験には何度もトライしても受からず、人生の方向を見失いかけた時期がありました。そんなときに支えてくださったのが堺のお豆腐屋安心堂の橋本様ご夫妻でした。その橋本様ご夫妻の勧めで参加した1996年、大正村掃除に学ぶ会。そこでご指導くださった鍵山秀三郎先生。

後に税理士事務所開設時、鍵山先生から今なお胸うつ手紙とともに相田みつを氏の「憂い」の詩の額装をお届けいただきました。その一節「語らざれば憂いなきに似たり」は今も戒めとなっています。

また、初めての顧問先にとお申し出くださった志ネットワーク青年塾塾長(元松下政経塾塾頭)の上甲晃先生からも大いなる力をいただきました。

私たちが生きている現在(今)は、かつて誰かが命懸けで守ろうとした未来。社会を変える第一歩は自分自身を変えること。そして、目に見えているものに捉われないこと、真実は、いつも目に見えないものの中に潜んでいてそれこそが一番重要なのだ。これからも、預かったこの命尽きるまで、縁の下の力持ちとして天命を果たしたいと存じます。



いする今
い。一を
た今年大
し期に切
まもしに
す。よた、
ろい素
しと直
く思に
おい学
願まべ

大槻 千佳子



しして人
ままよの
すく話
。見を
宣、聴
し脚き
く下、
おの俯
願実瞰
い践を
致をし

磯部 泰司



願のに執
い入な行
し塾ら草
までれ舟
する先
。こ生
よとが
ろを常
し知任
くつ講
おて師

吉村 昌也
(新)



き世役人
た界立生
いへの
でのか後
す。視を半
野学時
をび期
広、を
げ未い
て知か
いのに

葛西 友子
(新)



頑後き自
張半る分
りを時に
ま豊期目
すかとを
になりけ
る為。人事
生が(新)
ので

今仲 恵子
(新)



しな決本
たス意心
。テしの
いた自
ジ一分
の瞬を
扉一生
が瞬き
開にる
き新！
またと

石川 小巻
(新)



佐川 博敏

まだまだ発展途中なので、人間力向上をめざして今年も学びます。

松野 若斗
「やる気があればなんでもできる」を常に意識する。

懇親会に参加しませんか?
講座終了後、毎回有志にて懇親会を開催しています(約2時間程度)。
お時間の許す方は、ぜひご参加ください。

【お詫び】
先月号(第137号)の第十三期メッセージの中、氏名に間違いがありました。
深くお詫び申し上げます。

誤 **井出 俊文**
正 **井手 俊文**

あなたの記事を掲載します
素晴らしい人財の宝庫「人間学塾・中之島」。

イベントの広報や活動報告に「中之島ニュース」をご利用ください。
(お寄せいただいた原稿は、編集部で字数調整する場合があります。)

寺田一清先生に導かれて㉚ 近藤宏枝

「森先生の光は永遠に」

昭和六十年森信三先生九十歳「実践人冬季研修会」、生涯

修会」そして翌年「実践人夏季研修会」、生涯

最後の講演の為、車椅子でご登壇されました。有難いことにその時の講演録が、映像として残されています。その講演で森先生は、先に二人の講師のお話を拝聴されて「感動するということは、真理を身につけることで、ただでは済まない。疲れるという学費(授業料)を出さねばならない」と説かれ「日本の学問というものは、感動が土台である」と続けられました。そして本題の「生死観」について話されましたが、当時の先生の生活の状態で言うと、死ぬということはもう目の前に来ていて「手で触れるくらいにある」と表現されました。まず死ぬとは「生まれる前の世界に還ること」で、死ぬとは死ぬまでの間をどう生きるかということと説かれました。更に、心と肉体を使い古したから、もう業務は済んだ、役目は済んだからすと引つ込む。これを死ぬことと重ねられました。また多くの人が疑問に思っている、死んだ人間は生き返るかどうかということについては、生まれ変わるということを問題にする人には、個人的な、プライバシーな欲が何らかの意味でこもっているのだと指摘した上で、「散った花は元の枝には帰らない。これは本当に厳しい。人生二度なしは、その厳しさを含んでいる」と声を大にされました。

講演の最後に森先生は、生かして頂く最後の一瞬まで、自分に命ぜられた役目を果たさねばならないと話されました。先生が残された教え「天の封書」のことと理解しました。そして天から命ぜられたことを真剣にやつた森先生は九十七歳で還られましたが、身をもつて最後の一瞬まで役目を果たされ、教えは後世の人達に永遠に語り継がれると思いました。

◆日時 12月21日(土)午後一時
◆会場 大阪大学中之島センター 10階 ホール 34

◆講師 上甲 晃先生

志ネットワーク代表
チーム

◆第三土曜日



◆「我が人生の転機」

① 中之島ニュースは塾生・登録塾生の方用に作成しております。
事務局・編集部に無断で転載や特にコピーなどの配布ご遠慮ください。
よろしくお願ひします。
② 編集部アドレスは下記のとおりです。
事務局とは異なります!

2012nakanoshima@gmail.com

《人間学塾・中之島》次月案内

◆編集後記
いよいよ講義が始まりました。本格的な第十三期の始動です。十月の第一講は、石川真理子先生の講義でした。御成敗式目。明恵上人。日本史では習いましたがこんなに奥深いものであると知りませんでした。歴史は年号と内容を覚えるだけではないと

塾生講話には、井上貴子塾生と、林秀宣塾生にご登壇頂きました。感動的なそして氣迫あるお話ありがとうございました。
◆編集長 西村俊幸